

三好郡三名大絵図と三名士

地理班（徳島地理学会）

羽山 久男*

要旨：個人蔵で徳島市立徳島城博物館保管の明和2年（1765）～寛政12年（1800）頃作製と推定される「三好郡三名大絵図」がある。本図は彩色・見取り図の大型の絵図で、阿波国の土佐・伊予境に位置する三好郡三名村を中世から支配した土豪の三名士である西宇氏（西宇村）、藤川氏（上名村）、大黒氏（下名村）の屋敷と名（集落）、地名、往還、小道、堂宇、滝、吉野川の瀬（岩場）等の自然・文化景観をビジュアルに描いた、貴重な絵図資料である。大歩危・小歩危付近の瀬（岩場）を描いた「吉野川水路絵図」（高知県立図書館蔵）と天保2年（1831）上名村棟付帳との比較分析を行う。

キーワード：三好郡三名大絵図、三名士、棟付帳、西阿波山村、山村景観

1. 三好郡三名の自然景観

描く範囲を三好郡内とし、現存が確認されている絵図は「三好郡三名大絵図」（以下「大絵図」）¹⁾、「芝生村分間絵図」²⁾（現三好市三野町、山城総合支所保管）、「池田古図」（個人蔵）³⁾、吉野川上流の土佐国境の三好郡下名村から山城谷川口までの吉野川の瀬（岩場）34ヶ所を描いた「吉野川水路図絵」⁴⁾（高知県立図書館蔵）の4点である。また、岡崎三蔵系の実測図である三好郡分間郡図の伝存は確認されていないが、東西祖谷山を対象とした実測の「美馬郡祖谷山郡図」（個人蔵）⁵⁾が現存する。

「大絵図」は、土佐・伊予国境に位置する吉野川左岸の旧三名村⁶⁾を構成する西宇村・上名村・下名村^{かみみょう しもみょう}一帯を描いた大型の彩色・見取り図で、縮尺は4,200分の1程度と推定できる（口絵1参照）。本図は旧三名村域を中世から幕末期まで支配した土豪

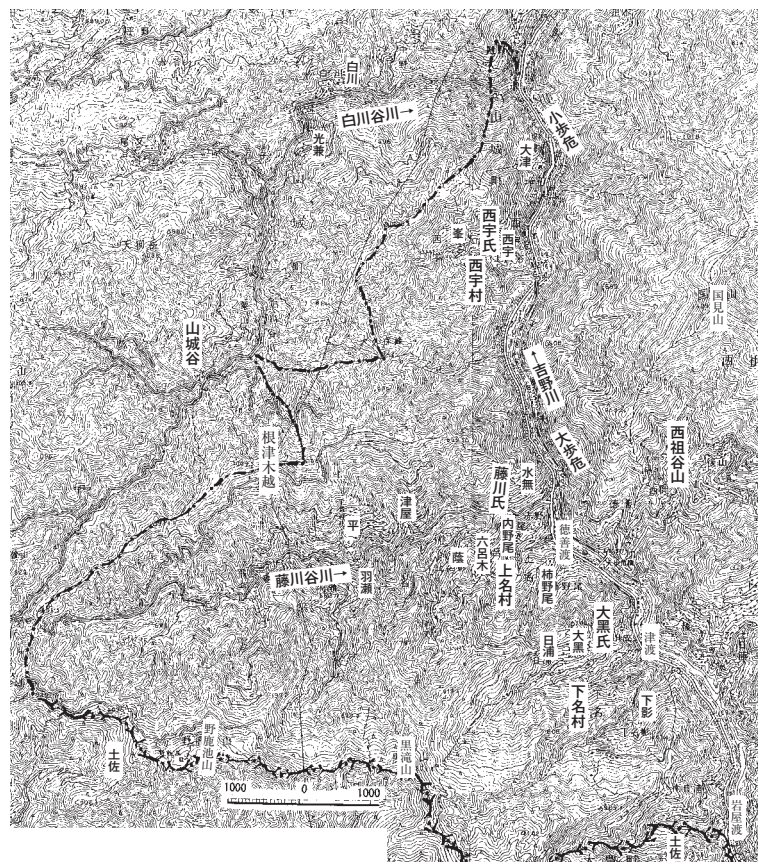


図1 三名村域（5万分の1地形図「伊予三島」「川口」平成14年発行）

* 〒770-8064 徳島市城南町1-9-8



図2 上名村内野尾名から見る大歩危橋付近 (2010.10)

で三名士と称される、西宇氏（西宇村）、藤川氏（上名村）、大黒氏（下名村）の屋敷地を中心に近世中～後期の景観を詳細に描いた、三名の状況をビジュアルに知ることができる貴重な絵図資料である。

三名という地名は享保8年（1723）の藤川只助（5代）拝知高物成帳⁷⁾にも「卯歳四月二十一日三好郡三名之内、高式百石上名村」とあり、享保期には三名の呼称が存在していた。

三名の東限は四国山地をV字谷で刻む吉野川の横谷である小歩危と大歩危峡谷を形成し、三波川帯に属する結晶片岩類で構成され、主として砂質泥岩からなる。この大歩危・小歩危峡谷は地質学的にも四国山地を構成する褶曲の南北方向にあたる大歩危脊斜構造として有名で、「祖谷・三名の含礫片岩」として1953年に徳島県指定天然記念物になっている⁸⁾。また、吉野川谷底部には国道32号とJR土讃線が南北に走り、土佐大豊境に位置する下名村南日浦の水準点197mから、北12kmにある白川口の西宇村殿野の水準点147mまでの比高は50mで、約240分の1の勾配である（図1参照）。図2は藤川氏屋敷が所在した上名村内野尾名から大歩危橋と、吉野川右岸の西祖谷山徳善名を俯瞰しており、壮年山地と吉野川のV字谷の景観がよくわかる。徳善名と吉野川左岸の上名村柿野尾名との間には「徳善渡」があり、祖谷山一帯への生活物資の搬入路であった。また、徳善名と上名との間の吉野川には「徳善浮橋^{はしけ}」があり、通行に資していたが、その後に艇に変わり、これが「徳善渡」となったとされる（図1参照）⁹⁾。

三名の西限は山城谷との境で、標高942～1,029mの分水嶺を形成し、萱と萩の群生で覆われるので、

山城谷と三名の人々は「カヤ野」と呼び、萱を干した肥グロ、家畜の飼料、屋根葺き材料として重要であった¹⁰⁾。標高1,060mの根津木越^{ねずきごし}は通称「ネズキ」「ウネ」と呼ばれ、白川谷の栗山・光兼名^{みつかね}→銅山川谷→伊予川の江へ出る重要な峠道であった¹¹⁾。また、この上名村の雪寄^{ゆきおし}、水無山^{みずなしやま}、唐谷峯^{からたにむね}、西宇山^{にしうやま}は藤川氏の鷹狩場であったとされる¹²⁾。さらに、土州大豊境の標高1,294mの野鹿池山^{のかのいけざん}と、標高1,209mの黒滝山^{くろたきやま}が分水界をなす。野鹿池山頂上には野鹿池があり、池岸に野鹿神社（享保6年（1721）に蛇王大権現から野鹿神社に改称）が鎮座し、雨乞いの神として尊崇されている¹³⁾。また、上名村羽瀬名から黒滝山越への道は土州奥太田（現大豊町）から吉野川本流に通じる（図1参照）。

2. 三好郡三名大絵図の作製目的

本図の標題は「三好郡三名大絵図」とある。また、絵図の外枠には西宇・藤川・大黒氏の名別の拝領高と農民数、三名士の屋敷地を中心として山城谷と、三名で分岐点となる地点までの「三名行程」（距離）が詳細に記されている。また、描かれる内容は三名士の屋敷地と館（家屋）の配置、「名」で示される集落、堂宇、山地、畠、道、往還、吉野川の瀬（岩場）、滝、橋、吉野川の支流である谷、土佐・伊予国境の小地名（小字）等の自然景観や集落・交通・地名等の文化景観を詳細に描いている。

本図の作成主体は村方でなく、藩であると考えられる。作成年季は絵図に記載される西宇武之丞・藤川隼太・大黒與惣太^{よそた}の系譜から、明和2年（1765）～寛政12年（1800）頃と推定できる¹⁴⁾。作成目的を特定することは困難であるが、幕府巡見使が藩主巡国のための作成が考えられる。三好郡への幕府巡検使の記録¹⁵⁾は寛永7年（1630）、享保2年（1717）、延享3年（1746）、宝暦11年（1761）、明和元年（1764）、天保9年（1838）であるが、おおむね美馬郡脇町→三好郡清水村→池田村→佐野村→讃岐の行程で、山城谷・祖谷山方面への巡検はなかったようである。

また、天保14年（1843）の藩主巡国¹⁶⁾は脇町→美馬郡郡里村^{こおざと}→三好郡西加茂村→池田村→脇町の行程で、山城谷方面への巡国は含まれていないようである。『阿淡年表秘録』¹⁷⁾によれば、藩主が寛政4年

(1792) 9月、同年10月に「公北方山分御検見御出」とあり、7～8日かけて巡国に出ている。さらに、文政5年(1822)12月、同6年2月、同7年には「為御鷹野北方筋へ御出」とあり約4～5日の日程で北方筋で鷹狩りに出ている¹⁸⁾。さらに、文政11年(1828)9月2日～27日には「公祖谷山為御検見御出子供踊御覧」¹⁹⁾とあるが、山城谷への検見はしなかったようである。また、本図のうち、藤川隼太屋敷周辺には「土州境鷹待人小屋」とある。

さらに、三名士には藩主に鷹を献上した文書が伝存している²⁰⁾。藤川氏は上名村六呂木名・平名、西宇氏は白川上流の粟山と西祖谷山の国見山、大黒氏は西祖谷山の鶏足山を鷹捕獲場としていた²¹⁾。さらに、藤川隼太屋敷南西部の土州境には南のとや・旭とや・磯とや・瀧とや・白石とや・チヌとや・池ノ本とや等の「とや」地名が多数見られる。この「とや」については『日本国語大辞典』²²⁾には、「鳥を飼っていておく小屋。特に鷹を飼育するための小屋ということもある。」とある。これらの点から本図の作成目的が藩主の鷹狩りに何らかの関係があることも考えられるが、三名士屋敷地を中心に、土州・豫州境の多数の地名や集落名、道、往還、瀬等の自然景観の表現から、土佐流木問題もあり、藩が土州・豫州境の状況を把握するために作成したことも考えられる。

3. 三名士の存在形態と農民支配構造

1) 三名士の拝領高・農民

三名士と対比される池田士は中世以来の在郷の土豪ではなく、天正13年(1585)の蜂須賀氏の阿波入封に随って来た譜代の家臣である。大西城代中村氏の与力^{よりき}であったが、中村氏の失脚とともに大西代官支配下の高取藩士となり、禄高は100～200石である²³⁾。

三名士の見居^{みずわり}は高取藩士で、与士^{くみし}か平士^{ひらし}の士分格である。まず、「大絵図」の上部に記される註記をみると、西宇氏は知行高150石・知行付(隸属)農民131軒、藤川氏は200石・131軒、大黒氏は200石・112軒である。三名士が拝領した知行地と、農民は近世前期から明治維新时期まで全く変更なく継続されている。三名士とも「成立書」²⁴⁾によれば、天正13年の蜂須賀氏の阿波入封時の召出で、西宇氏初代の

藤右衛門武家、藤川氏2代の隼人佐長則、大黒氏2代の清蔵武信ともに、元和元年(1615)の「大坂御陣御共出陣」とある。また、西宇武之丞・大黒與惣太は土州境の「御境目御固め御用」を、藤川隼太は同御用とともに、「流木方御用」を拝命している。

2) 西宇武之丞拝領高家数と屋敷周辺の景観(口絵2参照)

「大絵図」に記される拝領高・家数を示す。

高七石五舛九勺 家数八軒但シ小家共 水無名
高拾六石三斗二舛三合 家数五軒但シ小家共 西宇名
高拾壹石七斗五舛八合六勺 家数四軒但シ小家共
中内名
高拾二石壹斗一舛九合五勺 家数拾七軒但シ小家共
大津名
高拾五石四斗三舛一合五勺 家数拾六軒但シ小家共
峯名
高合六拾二石八舛三合五勺 家数合五十軒但シ小家共
西宇村分
外高四拾八石一斗一斗二舛二合 家数拾九軒但シ小家共
山城谷之内光金名
同高三拾九石一斗九舛四合五勺 家数八軒但シ小家共
同所白川名之内
惣高合百五拾石但シ名ニ付山共拝領 惣家数合七拾七軒
西宇武之丞

西宇武之丞の惣拝領高150石の内、西宇村内は62.0835石(41.4%)、惣家数77軒の内、同村内は50軒(64.9%)であるが、山城谷の白川谷川右岸の光金(兼)名に高の32.1%、家数の24.7%、同左岸の白川名に高の26.1%、家数の10.4%が所在することは注目される。すなわち、西宇氏は西宇村を存立基盤圏とするが、山城谷の2名に高の約3分の1、家数の約4分の1が所在する。

明和元年(1764)の「三好郡御巡検御目附様道筋村々家数人数社数寺数牛馬数高物成指出」²⁵⁾によれば、西宇村は家数44軒、人数350人、社数2社、寺真言宗常福寺1寺、高62.683石、物成21.939石、御請三ツ五歩(35%)である。「大絵図」に記載される西宇氏拝領家数50軒、高62.0835石とでは家数が6軒少ないが、高は一致する。文化期編纂の藩撰地誌『阿波誌』²⁶⁾によれば、西宇は戸数50戸、高62石、陸田(常畑)10分の9、水田(棚田)10分の1、田畑53町3反5畝とある。

口絵2は西宇氏8代の武之丞屋敷付近を示している。東の水流は吉野川の本流であり、モシバ瀬・乙瀬・榎ノ瀬・タテカエ瀬がみえる。しかし、「水路

絵図」の西宇付近には北から南へ、長瀬・轟瀬・六ッ石瀬・下行瀬・蛭瀬・音瀬・茂地坊瀬・榎野瀬・立川瀬・小仁和瀬が描かれるが、音瀬（乙瀬）・榎ノ瀬を除いて一致しない。図3に「水路絵図」に描かれる西宇村の茂地坊瀬（十七、五ヶ難所之内）を示した。同瀬は「水上ヨリ高低六尺（1.8m）、長壺丁（109m）川幅五間（9m）」と記され、2本の朱線は舟路と土佐流木路で、水面上には3ヶ所の大石（1つは「鳶ノ石」とある）と27ヶ所の小石がみえる。

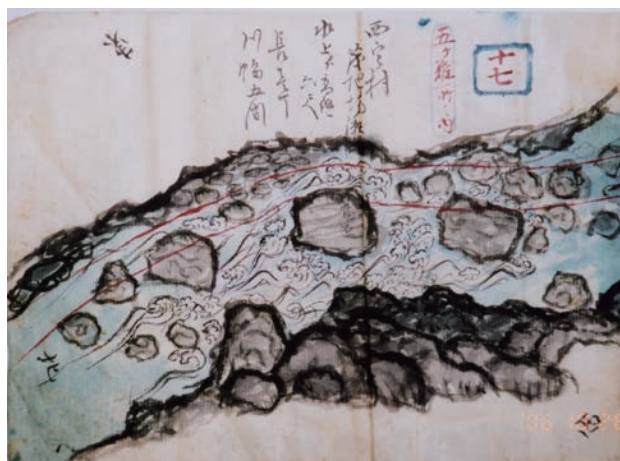


図3 西宇村茂地坊瀬（高知県立図書館蔵）



図4 西宇村の北部白川口南の崖地（三好郡三名大絵図）

国道32号は吉野川左岸を走るが、絵図にみえる土佐境に至る往還は西宇名にある西宇武之丞屋敷の真下を通り、南のタテカワ谷まで崖上を曲がりくねっている。絵図に記される道幅は「一尺三寸位」（約40cm）にすぎなく、屋敷地の東には小谷と常福寺（廃寺）があり、西には聖堂がみえる。屋敷地は現小字上西宇の斜面に比定されるが、現在の西宇史子氏宅は吉野川段丘面上の西宇小学校の北隣地（707-1番地）に所在する²⁷⁾。

また、絵図では屋敷地の下には段々畑が描かれる。明治2年（1869）の「拝知高物成指出帳」²⁸⁾では、西宇金五郎の「相付山共」の一円拝領の内、「切畑浮所務」（焼畑・伐畑を切畑浮きとしていた拝知（所務））として稗60貫、蕎麦6斗、大豆5升、小豆3斗、粟8斗、藍1貫目、炭3石がみえ、西宇村で山藍が見られることは注目される。

この外に、商品作物としては茶・煙草・楮皮・漆が重要であった。さらに、1950年の世界農業センサス²⁹⁾によれば、三名村の焼畑農家は169戸（農家戸数の34.9%）、面積は30町7畝あり、三好郡全体の577戸の約29%、85町1反9畝の約35%を占め、阿波北方山村で最大の焼畑村であった。

屋敷地の東山上には峯名・中内名、大津名があり、南のカモシカ谷（「ゼンリン三好市住宅地図2017・4」では名称なし）へ至る往還には鼓ウチ一本松・大歩危入口・ロウノモト・松ヤスバ・嶋川原・七十橋・銀左エ門潰エ・蔭山等の俗称地名が記されるが、明治9年（1876）の『三好郡村誌』³⁰⁾記載の小字名と一致する地名は少数である。その理由是不明であるが、『郡村誌』小字は地租改正による公称小字であり、一部に検地帳小字をほぼ継承していると考えられるが、西宇村検地帳が現存していないので、その関係を究明することは困難である。図4は西宇村の白川口から南の岩場を示している。白川北岸には「戸のの（殿野）、西宇村ノ内大津名入」とあり、北には西宇村と山城谷境の殿野名から「三好郡山城谷重實名境」の境道が描かれる。また、白川口に架かる「一本橋」（現白川橋か）と「観音堂」（現高崎神社か）と「道一尺位」の往還がみえる。その南には小歩危山と椋嶽と記される巨岩が描かれ、「サシデ瀧」が吉野川に流下し、小歩危出口付近には大津名の段々畑が描かれる。

3) 藤川隼太の支配構造

(1) 拝領の高家数

寛永元年（1624）「上名領知分棟付人数目録」³¹⁾によれば、上名村合わせて惣棟数61軒、人数82人である。人数の内訳は、本百姓5人（内上日裏名は他国者）、下人（本百姓に隷属する農民）、間人（もうと、名子下人から独立した本百姓の小作）2人、内1人他国者、奉公人（藤川氏の譜代家臣）27人、内他国

者10人、又下人（藤川氏に隷属する下男）14人、内6人他国者、子供18人、あるき（村内の触歩き）2人、内他国者1人、隠居4人、坊主祢宜2人である。本百姓5軒は上日裏・六呂木・坊前生・津屋・平5名の草分け的な初期本百姓と推定される。奉公人・又下人・あるき43人の内、17人（39.5%）が他国者であるが、藤川氏が土州・豫州等からの来^{きたり}人の多くを家臣や隷属民として包摂したことも考えられる。

「大絵図」に記される名別拝領高・家数を示す。

高三拾六石壺斗八舛四合四勺、家数二拾三軒但小家共 柿尾名

高三拾六石五斗二舛四合六勺 家数二拾二軒但シ小家共 内野名

高二拾六石二斗六舛七合四勺 家数拾四軒但シ小家共 六呂木名

高拾七石八斗七舛三合五勺 家数拾四軒但シ小家共 蔭名

高二拾六石壺斗四舛七合九勺 家数拾三軒但シ小家共 津屋名

高四拾石八斗一舛五合五勺 家数二拾九軒但シ小家共 平名

高拾五石六斗六舛七合五勺 家数拾二軒但シ小家共 弦巻名 高五斗二舛 上日裏名ノ内

惣高合二百石 但シ名ニ付山共拝領
家数合百三拾一軒

また、明和元年（1764）「家数人数社数牛馬数高物成指出」³²⁾によれば、上名村家数57軒、人数350人、寺真言宗持性院1寺、3社、牛30疋、高200石、物成55石、御請3ッ8歩（38%）で絵図拝領高と同じであるが、家数は絵図より74軒も少ない。しかし、享保8年（1723）「藤川只助拝知高物成帳」³³⁾によれば、高200石、請56石（免率28%）、夫銀301匁、家数150軒、百姓128人、奉公人22人とある。また、『阿波誌』³⁴⁾によれば、上名は戸数95戸、高200石、下等上雑陸田（中・下畑）66町9反、水田（棚田）1町3反とある。

(2)屋敷の配置と周辺の景観（口絵3参照）

藤川左岸付近の吉野川左岸には小ヤスバ・大ヤスバ・カメワリ・姥戻り・シタナカセ・カモシカ谷と、吉野川には小瀬・出合瀬がみえる。また、「水路絵図」の上名村には北から南へ佐久子瀬・上恵美良瀬・下恵美良瀬・境瀬がみえる。図5に「廿四、下恵美良瀬」を示した。「水上ヨリ高低四尺長壺丁、川幅五間、此瀬開凡百圓」とあり、舟路間には岩礁

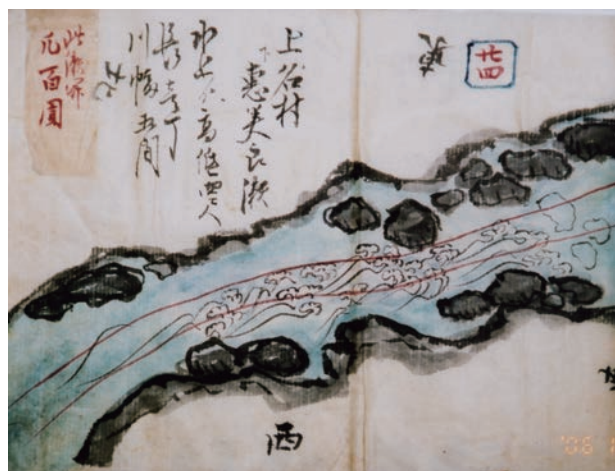


図5 上名村下恵美良瀬（高知県立図書館蔵）



図6 上名村藤川家墓所（2010.10）

はないが、瀬開には明治初期で百円要するとある。

さらに、藤川谷左岸には水無名・津屋名・平名の集落・畑が描かれ、「山城谷之内栗山境」の朱線の道があり、太朱線の豫州道には大切レノタオ（タオは峠や鞍部）・祢津木がみえる。平名・津屋名には木落瀧・一本松・行吉・榎木・山神がみえる。藤川右岸の内野尾名の藤川隼太の屋敷地は標高約300mの南斜面と推定でき、その東に多数の五輪塔をもつ豪壮な同家墓所が所在する（図6）。享保3年（1718）の「藤川沢進（4代）家数改帳」³⁵⁾によれば、屋敷地は表口50間裏行10間の500坪もあり、6棟の萱葺き家屋があった。母屋は葦葺で15坪の座敷、4坪の玄関、2坪の風呂場、21坪の奥座敷の間取りである。さらに、只之助部屋24坪、2階建て萱葺8坪の土蔵、萱葺8坪の長屋等がある。また、屋敷地の西には寺と堂が描かれるが、これは標高360m付近にある真言宗持性院と白山神社で現存する。

図7は吉野川左岸の標高230m付近の上名村の柿



図7 上名村柿野尾名農家の景観（2010.10）

野尾名の農家を示した。農家母屋の右には隠居屋・納屋があり、農家を棚田と段々畑、茶畑、野菜畑・雑木林が囲む。おそらく周辺の雑木林は昭和30年頃までは焼畑と楮の植林が行われていたと考えられる。

(3)天保2年（1831）上名村棟付帳による藤川氏の支配構造

本稿の目的の1つに絵図資料の総合化を図るために、絵図とこれに関連する地方文書とを摺り合わせる方法を採用することにより、絵図の背景にある近世の地域社会の空間や社会構造を解明することを目論んだ。しかし、三名村に関連する検地帳や棟付帳などの現存する基本的な文書は、「天保二卯歳三好郡上名村棟付人数御改帳」³⁶⁾ 唯1冊であった。以下、この棟付帳の分析から、近世後期の上名村の農民の社会身分構造と、一円知行主である藤川氏の村落支

配構造をさぐることにする。個別の百姓に関しては身居による格付けがあるが、本帳には保有する田畑や切畑面積が記されていないので、生産力視点からの階層構成の分析はできない。

表1は上名村を構成する柿野尾・内野・六呂木・房前生・津屋・平・^{つるまき}弦巻の7名別の農民の身居を示しており、総家数165軒は全て藤川象五郎（8代）の知行付百姓で、藤川氏が上名村を一円支配している事を示している。藤川氏の知行付百姓である^{いっけ}壺家頭入百姓25軒と、譜代家臣であった^{せんき}壺家頭入先規奉公人^{ほうこうにん}³⁷⁾ 7軒を合わせた壺家（本百姓）は36軒（百姓総数149軒の24.2%）である。

また、壺家の保護支配下にあり壺家の血族・分家や壺家の小作人等にあたる^{しょうけ}小家³⁸⁾は小家頭入先規奉公人58軒と、壺家に隷属する農民で使役される名子³⁹⁾・下人⁴⁰⁾ 16軒を合わせて90軒（同60.4%）で、壺家に従属する小家が多い。名別に家数をみると、藤川谷最上流の平^{たいらみょう}名44軒、藤川氏屋敷が所在する内野（尾）名27軒、柿野名24軒、房前生名・六呂木名各21軒、津屋名20軒、^{つるまきみょう}弦巻名8軒である。また、内野名の壺家頭入先規奉公人辰左衛門（歳59）は上名村の肝煎として棟付されている。平名は藤川南斜面の標高340～660mに立地する集落で、標高530mに氏神の平賀神社が鎮座する。

さらに、下人放しにより、壺家に隷属する小家下人12軒（柿野尾名・内野名の壺家倉右衛門と快右衛

表1 天保2年三好郡上名村棟付帳分析

	柿野尾名	内野名	六路木名	房前生名	津屋名	平名	弦巻名	計
壺家頭入百姓	3軒	1軒	2軒	1軒	1軒	13軒	4軒	25軒
壺家頭入先規奉公人	2	1	1	1	0	2	—	7
小家頭入先規奉公人	7	5	10	4	14	14	4	58
小家名子下人	3	9	—	4	—	—	—	16
部屋	2	4	4	2	4	5	—	21
頭入神主	1	—	—	—	—	—	—	1
寺	—	1	—	—	—	—	—	1
壺家計	5	2	3	2	1	15	4	36
小家計	10	19	13	16	14	23	4	90
家数計	24	27	21	21	20	44	8	165
人数計	103人	122人	85人	101人	86人	157人	41人	695人
内男	56	68	46	55	45	83	21	374
内女	47	54	39	46	41	75	20	322
牛数	19疋	20	14	15	13	32	7	120疋

註）天保二卯年三好郡上名村棟付人数御改帳（三好市山城総合支所蔵）より作成。

門下人)と、小家名子4軒(房前生名の壺家喜兵衛名子)が存在する。さらに、壺家本百姓下人や名子から壺家が絶家となったため小家から壺家本百姓に上昇したものが15軒もある。また、壺家の小家であったが、壺家に男子がないため、壺家の内分養子(実質的な内縁養子)⁴¹⁾になり、棟付改時に居懸養子⁴²⁾として給人藤川氏が有体(事実関係)を取り調べて書いた鍛証文⁴³⁾と、美馬三好郡代の証印である見印を受けて壺家の家督相続養子となった事例が17軒もみられる。このように、上名のような山間村でも生産力の向上により下人名子から小家に、小家から壺家に小農自立⁴⁴⁾による上昇した農民が壺家の半数以上を占めることは注目される。

また、西阿波山村の三名や山城谷・祖谷山では隠居制が行われたが、戸主が家督相続した時に隠居となり、父や養子が別棟に居住する「部屋」が21軒あり、「ソラ(空)」とよばれる当地を特色づける家制度であろう。さらに、上名村天保棟付帳では総戸数が165軒あるが、内、自分家を持つものが161軒、他郷稼ぎや借屋住まいが4軒で、牛を飼育する家が120軒(120疋)あることも山地農業として重要である。

4) 下名村大黒氏の支配構造

(1) 大黒氏屋敷付近の景観

口絵4に大黒與惣太屋敷付近を示した。屋敷地は古見名にあり吉野川左岸の近くの紺屋谷川南斜面(標高250m)には大黒勝氏住宅(字下名959-2番地⁴⁵⁾)を図8に示した。絵図では屋敷地の下斜面に段々畑がみえ、その上部に屋敷地があるので、現家屋は下の段に降りてきたものと考えられる。絵図にみえる大黒名の新田明神は現熊野神社、牛頭天王は



図8 下名村大黒氏住宅(2010.10)

現両皇神社に比定できる。また、絵図の上日裏名・下日裏名は現日浦に、蔭名は現下名影に比定できる。南の美馬郡祖谷山と記された付近は現西祖谷山榎木名がある。下名村と榎木名の間には「榎津渡」⁴⁶⁾があり、西祖谷山への生活物資の搬送道で、今久保名に通じていた。絵図の土州境にある「城山」は大黒氏が構築した「振越の城山北跡」の城跡(標高660m)に比定できる⁴⁷⁾。さらに、「土州往還」と記された道が2本描かれるが、下名村影から土州大豊・大砂子(現大豊町)にでる峠道であろう。

図9は吉野川右岸の西祖谷山有瀬名から北方を遠望した標高350~400mの吉野川左岸の下名村大黒



図9 下名村大黒名と上名村水無名(2010.10)

名、標高250~300mの上名村水無名と右岸の西祖谷山吾橋名のV字谷景観を示している。有瀬と吉野川左岸下名との間には「岩屋渡」(図1参照)があり、西祖谷山今久保名、東祖谷山釣井名と通じていた⁴⁸⁾。

(2) 大黒與惣太拝領高と農民

高二拾二石四斗五舂九合三尺 家数拾三軒但シ小家共古見名

高拾九石九舂四合 家数拾軒但シ小家共 大黒名

高三拾四石七斗八舂 家数三拾一軒但シ小家共 蔭谷名

高三拾三石六斗六舂六合五勺 家数十軒但シ小家共上日裏名

高三拾五石九斗二舂七合 家数拾六軒但シ小家共 下日裏名

高拾六石九斗三合七勺 家数拾一軒但シ小家共 羽瀬名 但シ是ノ分上名奥ニ有之候

外二三拾七石一斗六舂九合六勺 山城谷白川名ニテ家数二拾一軒但シ小家共 白川名

惣高合二百石但シ名ニ付山共拝領

家数合百拾二軒

大黒與惣太拝領地で注目されるのは、下名村から9 kmの北の山城谷の白川名に37.1696石、21軒と上名村の羽瀬名に16.9037石、11軒を持つことである。白川名は西宇氏も39.1945石、8軒を拝領している。羽瀬名に藤川氏の拝領地は存在しないが、大黒氏の拝領地が山城谷と上名村に所在するのは、中世以来の領有地と推定できる。また、『阿波誌』⁴⁹⁾によれば、下名は戸数102戸、147石、等中陸田（段々畑）10分の9、水田（棚田）10分の1、田畑53町3反5畝とある。

絵図には吉野川左岸にある金輪石が描かれる。「水路絵図」では下名村に柳瀬・笹ノ瀬・浦瀬・新瀬・長走り瀬・鵜ノ石瀬・築瀬の7瀬がみえる。図10に築瀬（三四）を示す。図には「水上ヨリ高低五尺、長三拾間、川幅七間」とある。

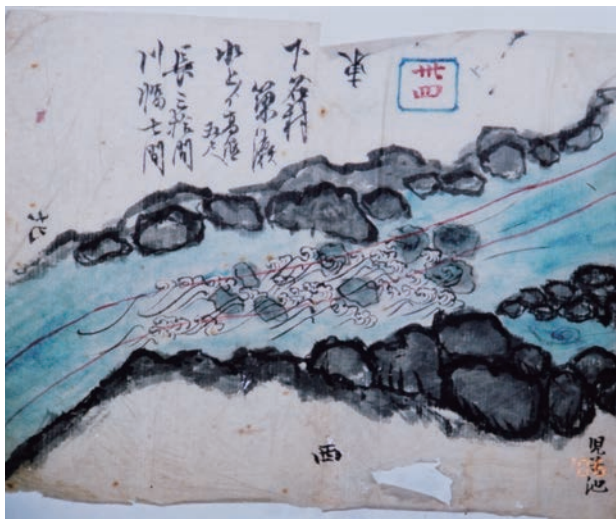


図10 下名村築瀬（高知県立図書館蔵）

5) 三名行程

「大絵図」の外枠に記される西宇・藤川・大黒氏屋敷から主要な地点までの行程（距離）を示す。

- 一三好郡山城谷境白川口小歩危入口ヨリ西宇武之丞宅迄凡三十丁程（3,300m）、同人宅ヨリ大歩危出口上名藤川谷迄凡二里余程（7,850m）
- 一同郡上名村藤川谷ヨリ同郡下名境迄凡半道程（1,960m）、藤川谷口ヨリ藤川隼太宅迄凡六丁程（650m）、夫ヨリ山城谷栗山境子ズギ（*根津木越、筆者注）迄凡一里半程（5,900m）
- 一同郡下名村上名境ヨリ大黒與惣太宅迄凡三丁程（330m）、同人宅ヨリ土州境迄四十丁程（4,400m）

『阿波誌』⁵⁰⁾には、「白地津」（三好郡中西村と白地村との間の吉野川の渡）より上流は「牛馬通じず」とある。さらに、「三名ホケ」⁵¹⁾として大歩危と小歩

危については、「絶嶮行く可からず、一人之を守れば百夫過ぎず、居民茶煙をひさぐ負ひ以て過ぐ見る者毛起つ、白川の西を小ホケ曰ふ、危険行可からず、藤川の西を大ホケと曰ふ、棧を踏み以て通ず、之を唐津橋と謂う、最も嶮なる者^{ママ}、曰く左坂、空穂、犬返り、泣聖、鋸齒、北西を按察ホケと曰ふ、六十歩毎に小休の處あり、行人是に於て相避けて過ぎ榎渡（*下名大黒と西祖谷山榎間の渡）に至る、南岸を祖山榎名と為、西南土佐に出す」と記される。絵図に描かれる土州や豫州との往還は道幅が30～40cmの踏み分け道に過ぎない。美馬郡猪ノ鼻峠と土佐を結ぶいわゆる三好新道が明治25年（1892）に開通するまでは、大歩危旧道は最大の難所であり、迂回して土州や豫州に出ていた。

前述したように、上名村の平名の平賀神社付近を中心にして、①根津木越（標高956m）から白川谷栗山→山城谷の伊予川→伊州川之江に至る北ルート、②上名村羽瀬名から黒滝山越（標高約980m）→土州奥太田へ出る南ルート、③藤川谷上流→土州境峠（標高約900m）→土州立川下名へ出る西ルート、④上名内野尾名→徳善渡→西祖谷山徳善名→重末政所（しげすえまどころ・旧西祖谷山村役場）へ出る東ルートがある。④のルートは東西祖谷山方面への生活物資を搬送する重要な峠道であった。

また、吉野川の舟運は白地までであったが、宝暦期（1751～63）に伊予川口の川口まで遡上することが可能となり、祖谷山・三名・山城谷の炭・煙草・梶・楮・木材が搬出されるようになった⁵²⁾。しかし、三好新道が明治前期に開通する明治前期頃までは、人の背によって搬送するいわゆる担夫交通^{たんぶ}が中心であった。三名の主要な生活物資である米・塩魚・塩・衣類・砂糖・油等が「伊予なかもち」⁵³⁾とよばれる男達により、川之江→銅山川→白川谷→根津木越→上名へ搬送されたとされる。

おわりに

歴史地理学では絵図そのものの料紙・顔料・GIS・3D・精度・景観・空間認識等からの分析が主流となっている⁵⁴⁾。しかし、筆者は絵図資料の総合化を図るために、絵図と地方文書を摺り合わせる分析を行う事により、絵図の背景に存在する近世の地域の

社会空間、災害史、生活空間、社会構造、生業、村の共同体、寺社・堂宇等の宗教的景観、農民と藩・武士との支配関係や土地の所有構造等の明らかにし、絵図資料の本質を求めるスタンスで研究を進めてきた⁵⁵⁾。この視点から三好郡三名大絵図をみると、いわゆる、三名士は初代藩主^{よししげ}至鎮に従軍し、大坂夏冬陣に出陣した功績もあり、近世初期～明治維新期まで藩の土州境目押御用や流木方御用を勤めた。また、高取藩士として、150～200石の耕地・山と77～131軒の隷属農民を一円拝領・支配して使役した。

一方、三名士屋敷を中心に描かれた「三名大絵図」は文字資料や自然・文化的景観は実に豊富で、当時の状況を知ることのできる貴重な絵図資料である。ただ、地方文書が天保2年の上名村棟付帳一冊しかなく、検地帳等の土地関係の文書が現存しないという史料的制約が大きかったため、目的とした内容に十分に達せられなかった。

参考文献・註

- 1) 見取り図・彩色、個人蔵、徳島市立徳島城博物館保管。
- 2) 岡崎三蔵系実測分間村絵図の作製途中図で、山地・平地・水系等の自然景観を描くが、家屋・田畑等は未完成である。
- 3) 天明期頃作製の池田村の実測図か、彩色図、個人蔵、近世後期の郷町池田の景観を復原できる村絵図。
- 4) 高知県立図書館蔵、明治前期作成、28×21cm。
- 5) 縮尺18,000分の1の実測分間郡図、132×180cm、個人蔵、徳島市立徳島城博物館寄託。
- 6) 西字・下名・上名3村が明治22年合併して三名村が成立、昭和31年に山城町と合併。
- 7) 田村正編、三好郡三名村役場発行(1968)：『三名村史』216頁。
- 8) 日本地質学会編(2016)：『日本地方地質誌7 四国地方』朝倉書店、59～60頁。徳島県教育委員会・徳島新聞社編発行(2007)：『徳島の文化財』425頁。徳島新聞社編(1981)：『徳島県百科事典』212頁。
- 9) 前掲7) 573～574頁。
- 10) 前掲7) 8頁。
- 11) 前掲7) 574～575頁。
- 12) 前掲7) 212～213頁。
- 13) 前掲7) 9頁。佐野之憲編・笠井藍水訳(1976)：『阿波誌』歴史図書社、317頁。
- 14) 宮本武史編(1970)：『徳島藩士譜 上巻』210頁。同編(1972)：『徳島藩士譜 中巻』372頁。同(1973)：『徳島藩士譜 下巻』150頁。
- 15) 前掲7) 122頁。
- 16) 前掲7) 123頁。
- 17) 徳島県史編纂委員会編(1964)：『阿淡年表秘録 巻八』534・559・560・609・610・613・637頁。
- 18) 前掲16)。
- 19) 前掲11)。
- 20) 前掲7) 212頁。
- 21) 前掲7) 8頁。三好郡役所編(1923)：『三好郡志』名著出版復刻版、164～165頁。
- 22) 小学館編(2001)：『日本国語大辞典 第二版』1362頁。
- 23) 池田町史編纂委員会編(1983)：『池田町史 上巻』242～249頁。
- 24) 前掲14)。
- 25) 前掲7) 112頁。
- 26) 前掲13)『阿波誌』310～313頁。
- 27) ゼンリン住宅地図『徳島県三好市』2017年4月。
- 28) 前掲7) 221～222頁。
- 29) 1950年世界農林業センサス、徳島県統計書。
- 30) 前掲21)『三好郡志』149～151頁。
- 31) 徳島県立図書館蔵、呉郷文庫、稿本。
- 32) 前掲21)『三好郡志』151～154頁。
- 33) 前掲7) 112頁。
- 34) 前掲21)『三好郡志』151～154頁。
- 35) 前掲21)『三好郡志』149～151頁。
- 36) 三好市山城総合支所蔵。
- 37) 高田豊輝(2001)：『阿波近世用語辞典』202～204頁。
- 38) 前掲37) 179頁。
- 39) 前掲37) 270頁。
- 40) 前掲37) 113頁。
- 41) 前掲37) 267頁。
- 42) 前掲37)。
- 43) 前掲37) 85頁。
- 44) 渡辺尚志(2014)：「近世の村」岩波講座『日本歴史 第11巻 近世2』所収、143～145頁。
- 45) 前掲27)。
- 46) 前掲7) 572頁。
- 47) 徳島県教育委員会編(2011)：『徳島県の中世城館 徳島県中世城館跡総合調査報告書』403頁。
- 48) 前掲7) 574頁。
- 49) 前掲13) 310～313頁。
- 50) 前掲13) 314頁。
- 51) 「ホケ」は「ホキ」が転訛したのもで、『日本国語大辞典 第二版 12巻』(小学館)によれば山腹も険しい所、がけとある。46頁。
- 52) 前掲7) 576頁。
- 53) 前掲7) 575頁。
- 54) 杉本史子・磯永和貴・小野寺淳・平井松午他編(2011)：『絵図学入門』東京大学出版会。
- 55) 拙著(2015)：『知行絵図と村落空間—徳島・佐賀・萩・尾張藩と河内国古市郡との比較研究—』古今書院。

Miyoshigun Sanmyou Ooezu and Sanmyoushi of Miyoshi County in Awa Domain

HAYAMA Hisao *

* 1-9-8, Jounan-cho, Tokushima 770-8064, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.62 (2019), pp.205-213.

